

した。12月14日より、GEMによる化学療法を開始した。その後、閉塞性黄疸の併発、消化管出血を繰り返し平成19年6月9日永眠した。

【考察】本症例は膵頭部の軽度の壁不整がある単胞性で内部が均一な嚢胞であった。仮性嚢胞と一旦診断したが、結果的に嚢胞性の浸潤膵癌であった。MCC, IPMC, Serous cystadenocarcinoma等との鑑別が問題であった。肝転移のため非切除となったが、結果的に原発巣を残したことがその後の出血につながった。

Session III 『膵 (2)』

9 腎細胞癌異時性膵転移の3切除例

金子 和弘・若井 俊文・坂田 純
白井 良夫・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【背景】腎細胞癌の転移は、肺、肝、骨、皮膚などへの血行性転移が多く、膵への転移は比較的稀である。異時性膵転移の3例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

〔症例1〕56歳、女性。1979年、右腎癌に対し腎臓摘出術を施行した。1994年(初回手術より15年)CT検査で膵体部、膵尾部に2個の多血性腫瘍を認め、膵体尾部切除術を施行した。2002年より肺転移を認めているが、無治療で著明な増大なく、膵転移手術後14年生存中である。

〔症例2〕40歳、男性。1985年、左腎癌に対し腎臓摘出術を施行した。2006年(初回手術より21年)CT検査で膵頭部、膵体部に多血性腫瘍を2個認め、幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した。その他、異時性多発肺転移に対し3回の肺部分切除、縦隔リンパ節転移に対しリンパ節郭清を施行した。

〔症例3〕68歳、男性。2004年、右腎癌に対し腎臓摘出術を施行した。2007年1月のCT検査で膵体部に多血性腫瘍を2個認め、同時に発見された横行結腸癌とあわせ、膵体尾部切除、横行結腸切除術を施行した。病理診断はいずれも腎癌の膵転

移であった。

【結論】腎細胞癌の異時性膵転移は積極的外科切除により予後の改善が期待できる。

10 groove pancreatitis の1例

佐原 八束・福成 博幸・岡島 千怜
樋上 健・設楽 兼司・林 哲二
味岡 洋一*

県立十日町病院外科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
分子・診断病理学分野*

症例は74歳、男性。主訴は嘔吐。上部消化管内視鏡にて十二指腸下行脚に浮腫状の全周性狭窄を認め、腹部CTでは膵頭部と十二指腸下行脚の間に嚢胞成分を伴う腫瘤性病変を認めた。保存的治療を行うも改善傾向なく、groove pancreatitis等を疑い膵頭十二指腸切除術を施行した。病理検査では悪性所見はなく、副膵管由来の炎症性変化による十二指腸狭窄であった。膵実質には炎症の所見はなくgroove pancreatitisのpure formと考えられた。同疾患は十二指腸下行脚、膵頭部、総胆管に囲まれた領域に限局した膵炎で十二指腸狭窄や総胆管狭窄を起こすことが多い。術前診断が困難であるが同領域の腫瘍についても常に念頭に置く必要がある疾患である。

11 膵腫瘍に対する腹腔鏡下手術～合併症を減らすための工夫～

皆川 昌広・黒崎 功・二瓶 幸栄**
塩路 和彦*・北見 智恵・高野 可赴
佐藤 大輔・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野
同 消化器内科学分野*
鶴岡市立荘内病院外科**

当科では膵癌以外の膵腫瘍に対して、積極的に腹腔鏡下膵切除を行っている。今回、同手術の主要合併症である出血、膵管損傷、膵液瘻を減らすための工夫をビデオ供覧・紹介する。不要な出血